

多摩川 秋川の アイ

自然豊かなあきる野には、広い河川敷が現在も残され、東京都内としてはとても貴重です。しかし、河川敷は「気まぐれな自然」で、水・生き物・人間が複雑に関わり合う場でもあります。

今回は、河川敷の**白黒劇場**、あきる野の川辺のお話です。



河原よ、人間の場、生き物の場、永遠に分ち合う場

恵みの多い川は、人間にとっては放っておけない場所です。生き物や水を資源として利用できるうえに、癒しの場所にもなります。そんな川を人間が利用し過ぎてしまうと、自然の魅力はなくなり、悪化する「流れ」になってしまうこともあります。「自然との共存」とは、勝ち負けの中で生まれた人間と自然のバランス、又は、人間の都合によって、自然が必要だと判断され残されてきた結果なのかもしれません。実際に、人口密度が高い程、自然は少なくなるので、自然愛が必要とされます。この先、人間と自然がより良く「共存」していけることを願っています。

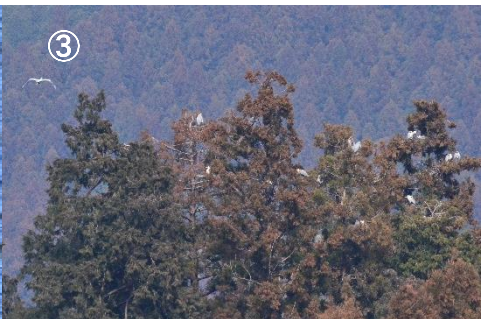


夏に人々で賑わう秋川の様子。BBQに川遊びなど、人間にとっては楽園のようです。

ゴミは流されたり、捨てられたり・・・それらと暮らさなくてはいけないバン(左)やオオバン(右)。

大人気の「魚肉」を巡る問題

「釣り」に力を入れているあきる野は、長年に渡り魚類の放流や川の管理などを行っています。数十年前と現在の秋川の生息魚類が大きく変わったことで、川に関係する生き物も変わりました。さらに、衛生面も良くなったことにより、魚類が自然と増加しました。生きることに精一杯の野鳥などの捕食者も、餌が豊かになった状況を見逃さず、昔に比べて増えた種類もあります。このような結果から、川は人間と生き物の競争の場であることが分かります。



①猛禽類で全国的に希少となっているミサゴは、「アユ釣り」が得意なので、アユを目当てに毎年あきる野に一時滞在する個体があります。②西多摩エリアでは希少なミコアイサは、カマツカや国内移入種と言われるカワヨシノボリなどのヨシノボリ類を餌としているようで、わずかですが、越冬のため毎年飛来しています。③一方で、年々増加しているカワウやアオサギの群れは、市民の暮らしにも影響を及ぼす状況になっています。

あきる野の河川敷、外来種大集合・・・

ガビチョウ(①)、カオグロガビチョウ、オオクチバス(②)、ニジマス、アカミミガメ(③)、ウシガエル、アメリカザリガニ、クビアカツヤカミキリ、オオキンケイギク、オオブタクサ・・・ 挙げだしたら切りがない程、あきる野の河川敷には外来種がたくさんいます。外来種が増え続ける理由の一つが、無責任なペットの飼い主にあります。ある種が特定外来種に指定され販売禁止になったとしても、すぐに新しい種がペットショップに並び、無責任な飼い主の行動によって、自然界に外来種が広がっていきます。このように、大切な日本の自然が「流されてしまう」のです。



①



②



③

河川敷で、めったに見れない「珍鳥」との出会い

河川敷の自然に限りませんが、時季によって見られる景色や生き物が大きく変わる場合があります。迷鳥や渡りで一時的にしか見られない野鳥や、環境の変化などにより数を減らした希少種などがその例です。河川敷は奇跡的な出会いが起きる可能性を秘めています。



河川敷の湿地などでまれに見られるタシギ。田んぼの間を渡ろうとして、防鳥ネットに引っかかってしまったのでしょうか。偶然見つけ、助けることが出来ましたが、二度と飛ぶことができない傷が残りました。タシギは米を食べませんが、残念な結果となってしまいました。

秋川渓谷で絶滅が心配される生き物の一つヤマセミ。自然豊かな渓谷環境の代表者です。川に人工的な支障物などが増えると、個体数や分布は減少します。以前は、秋川の下流部まで生息していましたが、現在は上流部でまれに見られる程度の生息状況になってしまいました。

変わりやすい、気まぐれな流れ



川は、穏やかで美しい風景が眺められる時もあれば、荒れた天気で氾濫する時もあります。水量のコントロールができるダムが存在しない秋川は、特に変化が激しくなります。

川の「気まぐれな流れ」と付き合い合っていくには、人間が川の多面性を十分に理解する必要があります。

人間と生き物の未来のために、より良い関係を築くべきではないかと思います。

